

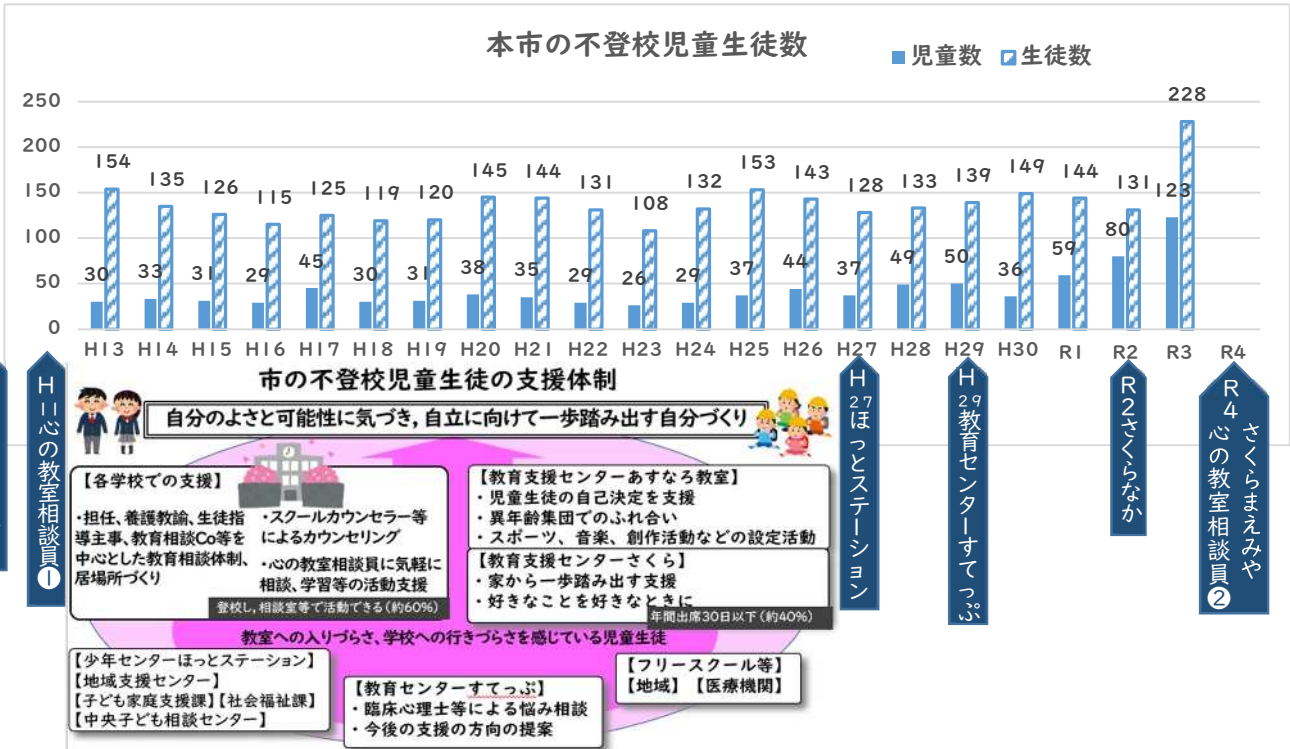
安心できる居場所で社会的自立をめざして ～学校へ行きづらさを感じる子どもたちのために～

各務原市教育委員会 学校教育課

1 はじめに

本市の不登校児童生徒数は、昨年度小学校123人、中学校228人と過去最高となった。教室へ入りづらさ、学校への行きづらさを感じている子どもたちが年々増加傾向、かつ低年齢化し、市の喫緊の課題となっている。

2 本市における不登校児童生徒数の推移と不登校支援体制



上の図表は、本市における不登校児童生徒数の推移と不登校児童生徒の支援体制である。

グラフは、不登校児童生徒数であるが、ここ数年の出現率は上昇傾向にあり、特に小学生の出現率上昇は顕著である。支援体制として、平成5年に教育支援センター「あすなる教室」を設置、平成11年には全中学校に心の教室相談員を配置して対応してきた。しかし、近年対象となる子どもたちの低年齢化や多様化が課題となり、それに対応できるよう、令和2年に「さくら・なか」を設置し、今年度は全小学校にも心の教室相談員を配置するとともに、10月には支援の拠点となる「さくら・まえみや」を開所し、支援体制の充実を図ってきた。また、平成27年に「ほっとステーション」、平成29年には「教育センター『すてっぷ』」を開所し、子どもたちや保護者からの相談体制の充実にも努めてきた。それぞれの機関の連携を強化し、子どもたちの居場所づくりに努めている。

3 心の教室相談員を全小中学校へ配置

各学校の心の教室相談員は、教室への入りづらさや学校への行きづらさを感じている児童生徒の悩みを聞いたり、学習等の活動を支援したりしている。

教室では、所属学級と同様の時間割で図工などの活動を行ったり、社会の授業をZoomで受けたりする子もいる。また、昨年度全欠状態だった子が毎日登校



している事例もある。これらは、単に心の教室相談員が配置されたからだけではなく、その子の興味のあるキャラクターのマンホール塗り絵を毎日1つずつ塗って掲示できるように担任の先生や教室の心の教室相談員からの働きかけがあったり、担任の先生や相談員からのミッションとして毎日のやり取りがあったりすることで登校につながっているケースが少なくない。心の教室相談員を活かしながら学校体制で進めていくことが大切である。

4 コンセプトの異なる2種類の教育支援センター「あすなろ教室」と「さくら」を設置

本市は、教育支援センターとして「あすなろ教室」と「さくら」を設置している。「あすなろ教室」は、生活のリズムづくり、異年齢の小集団での活動を通して学校復帰を含む社会的自立を目指してきた。「さくら」は、不登校が長期化している児童生徒が家から一歩踏み出す居場所として、自分の好きなことや興味のあることから始めることを大切にしている。

■教育支援センター「あすなろ教室」

「あすなろ教室」では、曜日ごとにスポーツ、外国語活動、音楽、ふれあい活動、創作と設定活動を位置づけている。通室前に相談・見学・体験をし、面談では、自分の好きなこと興味のあることや「あすなろ教室」でどんな力を伸ばしたいのか、どんな利用の仕方をするのか、児童生徒本人が自己決定する場を持つ。面談には、「教育センター『すてっぷ』」の臨床心理士も同席し、「あすなろ教室」の指導員に継続的にコンサルテーションを行う。



1日の流れとして、午前中は個別に学習に取り組んだ後、小集団での設定活動を行う。設定活動では自分や仲間の良さに気付けるような場を位置づけている。午後は、半日共に過ごした仲間と共にどんな活動をしたのか自分の考えを伝えたり仲間の意見を聞いたりしながら決めている。

「あすなろ教室」ではこのように生活リズムを整えながら、異年齢の小集団での活動を通して自分のよさに気付いたり、人との関わり方を学んだりしながら、学校復帰も含め社会的に自立することを目指している。

■教育支援センター「さくら・なか」「さくら・まえみや」

「さくら」は、自分の好きなこと興味のあることを自分で決めて行う。これまでの「さくら・なか」に加えて、今年度後期から新たに拠点となる「さくら・まえみや」を開所した。学習、畑での野菜づくり、セラピードッグとの触れ合いなど広い施設を生かして様々な活動を行うことができる。



「さくら」を利用する際、手続きや予約等は一切必要ない。「行ってみよう」「やってみよう」と本人が思えた瞬間を逃すことなく、家から一歩踏み出す居場所づくりに努めている。学習の遅れが気になる子には学習支援を、ものづくりが好きな子にはトイレトペーパーの芯や段ボールなどの廃材、またミシン等の道具などを準備する等、個のニーズに応じた支援を行っている。

「さくら」では、好きなことや興味のあることを行う中で自分の良さや可能性に気づき、エネルギーを貯めながら社会的に自立することを目指している。

5 おわりに

今年度新たに心の教室相談員を小学校に配置したことで、昨年度全欠状態だった児童が登校したり、「さくら・まえみや」の利用者数がわずか3ヶ月で30人だったり、安心できる居場所が学校内外にあることは、児童生徒や保護者、また先生方の声からもそのニーズの高さを感じている。

一方、心の教室相談員について、相談室の利用の仕方やどのように連携するかに課題がある。校内でどのように活用するか教育相談 Co を中心としながら組織的に対応する必要がある。さらに、魅力ある学校・学級づくりを推進する。「さくら」は安心できる居場所づくりに努めてきた。今後はさらに学習保障にも力を入れていきたい。